

## ティーチング・ステートメント

所属 工学部電気電子工学科

名前 伊藤 佳卓

作成日 2021年3月9日

### 【責任】

電気電子工学科に所属し、専門である情報学を中心として、教育・研究活動を行なっている。授業は情報学関連の科目以外にも専門科目の習得に必要な基礎科目を担当している。また、ゼミ担任として学業以外の学生指導・就学支援（PF 面談や就職指導など）も行なっている。また、研究活動で人工知能を扱っているため、人工知能の説明を学内や学外で講演を行うこともある。

### 【理念】

学生には、自ら学ぶことを武器にして社会で活躍できる人材となってほしいと考えている。私が専門としている情報学は日進月歩で技術が変化する。私は SE やプログラマーとして民間企業で働いた経験からこの変化への対応が重要であると実感している。この変化に対応するためには自ら学ぶことが重要であり、これを疎かにすると社会で取り残されてしまう。このようなことがないように学生のうちに自ら学ぶための基礎力を身に付けてほしいと思う。この基礎力は「ものづくりの楽しさを知る」、「自分への自信」、「忍耐力」だと考えている。これらの基礎力の重要性を認識して高めてもらえるように、授業や学生指導を通して教育活動を行う。

また、教育活動は教員も学生も楽しまないと効果が上がらないと思うので、お互いに楽しく気軽にコミュニケーションを取れるように心がける。

### 【方針・方法】

自ら学ぶための基礎力を大学生生活の様々な活動（授業や研究活動、部活動やアルバイトなど）を通して身につけてもらう。これらの活動の継続には楽しむことが重要であるため、学生を支援する教員も楽しみながら教育活動を行うことを心がける。

#### (1) ものづくりの楽しさを知る

- ・ ものづくり（基礎科目では応用課題）を行うと自分の足りない知識がわかり、目的があるとその知識の習得が苦ではなくなるため応用科目でものづくりの機会を増やす。また、基礎科目と応用科目の繋がりを両方の科目で伝えることにより、特に基礎科目の学ぶことの意義を認識できるようにする。
- ・ 卒業研究は1人1テーマとして、自分が何を研究するのかを明確にする。特に大学院に進学すると専門性が高まり研究内容の幅が広がりものづくりの機会が増える。ゼミ活動の早い時期から研究を開始して「研究が楽しいので大学院に進学したい」と考える学生を増やす。また、低学年から大学院の説明をして卒業後の選択肢として考えられるようにする。

#### (2) 自分への自信

- ・ 成功体験や努力して何かをやり遂げた経験があると自信が持てるため、学生のうちに卒業後も話のネタとなる成功体験や経験をしてもらう。これは部活動やアルバイト、ボランティア

ィアなど学業以外でも良いのでこれらの活動を行うように指導する。活動を開始できない学生には、PF 面談などを通して一步踏み出すための後押しを行う。

(3) 忍耐力

- ・ 研究発表を行う事で予稿の提出や発表資料の作成、発表練習を通して苦しい日々を経験できるため、研究発表を行う機会を増やし将来の糧としてもらう。
- ・ 私が就職氷河期に就職活動を経験しているためこの経験を学生に伝えて、就職先の目標を高めに設定し粘り強く就職活動を行うように促す。

(4) 楽しく気軽なコミュニケーション

- ・ ゼミ内ではチャット形式のアプリケーションを導入して、私はもちろんゼミの先輩ともコミュニケーションが取れる場を与える。また、このアプリケーションにより卒業後も連絡が取れるようにする。
- ・ PF 面談などの1対1で話す機会はなるべく本音で話せるように堅苦しさを排除するように心がける。

【成果・評価】

- ・ 情報処理技術演習の授業アンケートで毎年「様々な技術に触れることができ理解が深まった」などのコメントがあった（2020～2023年度）。
- ・ 現在まで学部ゼミ生3名が卒業研究の内容を学会で発表した（2023年度時点）。
- ・ ゼミ生の半数以上がSE・プログラマの職種として就職した（2023年度時点）。
- ・ オープンキャンパスのボランティア学生が年々増加している。

【目標】

- ・ 2024年度から学部ゼミ生にゼミ外での研究発表を4回以上行う。
- ・ 研究発表に向け学生自身で研究計画を立て実行し、その振り返りを共に行う。
- ・ （長期目標）大学院に進学するということが特別ではないという雰囲気を作る。
- ・ （長期目標）ゼミ生から国際会議へ参加したいと申し出を受ける。